全カリ
No.11
News Letter
1999.7.10
立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

「全カリ総合教育科目カリキュラム改革を語る」

藤原　新氏　（経済学部助教授・総合部会専門委員）
佐々木一也氏　（文学部教授・全カリ研究開発広報委員）
下浦　享氏　（理学部助教授・情報研究室主任）

佐々木（司会）　全カリも始まってから3年目に入るわけですが、言語のほうは形が整って、ペースがつかめてきたのではないかと思います。総合科目は、ここでようやくメインの話題になりつつあるというところだろうと思うんですね。

私は当初からかかわっていたので、今のカリキュラムに対して責任があるんですが、新しい立場から今のカリキュラムをどう見るか、どこが問題だと思うので変えなければいけないと考えていらっしゃるか、藤原先生からお話しいただければと思います。

藤原　問題の一つは、どうも総合のほうは、形は大きく変わったけれども、中身はそれほど変わっていないではないかという意見が、学生も含め、あちらこちらから聞こえることに表われているのではないでしょうか。内容の検討がまず第一に必要だろうと思います。

そして、内容を新しくしていく場合には、規程その他、いろいろ形式も整えていく必要がある。ただし、これについては学生が混乱することのないように、徐々に移行措置をとりながらやっていかなければいけない。

総合Bという非常に新しい試みも全カリからスタートしました。これもこれから拡充していこうと考えていますが、それをどのように学生のニーズと照らし合わせながらやっていくかも、一つ大きなテーマだと思っています。

佐々木　ありがとうございました。それでは、下浦先生、お願いします。

下浦　全カリになってから情報をどうするかというのは、いろいろな意味で重要だと思うんです。まず、立教には情報を専門とする部局がどこにもない。どこかが立教大学の情報関係を引っ張っていくという形には全然なっていなかった。あとは、ここ数年の間の情報環境の変化、教員も学生も、きっと保証人も含めておたおたするような面があるかと思います。結果として、今は情報の素養を身につけることが、学生にとっても非常に強いニーズであるし、その学生が社会に出ていったときに社会でそれをきちんと活用することが、社会的にもすごく求められているという状況にあると思うんです。

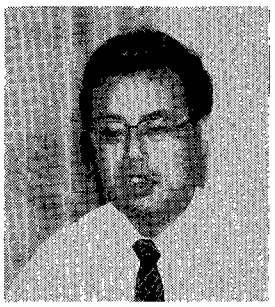
ですから、立教大学もある種、情報を専門にするような部局、学部か学科を作ってやっていくというのがオーソドックスなやり方かなと思うんです。たまたま3年前、全カリが始まったときに、各学部からコマを出していただいて、全カリでやろうということがあった。それはいま申し上げたオーソドックスなやり方ではなくて、立教にある手持ちの駒のなかで新しい情報環境に適応して新しい情報教育を作れないかという実験をやったんだと思います。

しかし、結局、世の中の動きの速さとか、いろいろなことに教員の側もなかなかついていけない。かといって、専門教育ではすごい速度で情報機器やネットワークを利用するようになっているわけですから、その部分をどうしても教えないといけない。そういう中で全学的な情報を考える余裕がなかったのではないかと私は考えています。

2年間やってきて、結局、学部に学部由来コマを戻しましょうということになった背景には、そういうことがあると思うんです。

そういうことを踏まえて、今できる最大限のことは何かというのが今回の改革案だと思います。最低限、学生がやりたいと思っていることは何か。社会が求め

ていることは何かというと、とにかくコンピュータ機器が触れて、ネットワークを何らかの形で活用できることだろう。これは将来ひょっとしたら初等・中等教育で行われてしまうような内容かもしれないですけれども、当面そこの部分を大学がケアせざるを得ない。



下浦　享　氏

ほぼ全員の学生にそういうケアをしようとすると、効率よく短い時間の間にできるようなことがたぶん望ましかろうというので、講習会案を出したわけです。

全カリの情報科目では、専門学部がないわけですから、専門学部ではできないような内容をぜひやりたいと考えています。専任の方の最も得意とする分野で、あるいは場合によっては非常勤の枠をうまく使って、できるだけ最先端に近いようなことが教えられるようにできると、すごく全カリらしいものになるのではないかと考えています。

佐々木　ありがとうございました。いま両先生からお話を伺ったんですが、共通するテーマが出ていたと思います。学生のニーズといいましょうか。いま私が考えるには、全カリの重要な改革ポイントはいくかつあるんですけれども、今日は総合Ａと情報については関係した先生方がおられるので、少し突っ込んでお話をしたいと思います。

学生のニーズを拾い上げていかなければいけないという観点から、まず総合Ａのほうを話題にしてみようかと思います。

藤原先生は、総合Ａに関しては、学生のニーズとのずれといったところで、どんなことを具体的にお考えになっていますか。

藤原　まず一つめは、よく言われることですが、分野間のアンバランスということですね。１コマあたりの平均履修者数を見ても、カテゴリーごとにずいぶんばらつきがありまして、学生数の多いカテゴリーと少ないカテゴリーでは平均履修者数で２倍ぐらい開きがある。これは学生のニーズとの乖離という意味でアンバランスを示していると思います。

もう一つは、一般教育が持っていたバランス、あるいはアンバランスを総合Ａがそのまま継承してしまっているということです。

内容についてはシラバスもずいぶん充実してきて、学生にとってこれがどういう科目であるかがわかりやすくはなっているんですが、ただし、行われている内容を見てみますと、先生によって非常にまちまち。内容がまちまちなのは当たり前ですけれども、どういうポリシーで全カリの授業を運営していくのかということについての先生のお考えに、ばらつきがあまりにも大きいという気がしています。

非常に専門的なことを深く講義しているような先生もいらっしゃいますし、入門的な内容を考えておられる先生もいらっしゃる。この両者を組み合わせてカリキュラム全体のなかでどういうバランスでやっていくのが学生にとって望ましいかという議論があまりされていないんですね。それをこれからやっていかなければいけないと思います。

ただし、学生のニーズもとらえるのが非常に難しいわけで、各専門学部あるいは全カリも言語などで行なっている学生アンケートを全カリのたとえば総合Ａでどのように活用していけるのかということも、今後検討していく必要があると思います。

佐々木　ありがとうございました。下浦先生、全カリの授業を担当するうえでの悩みというか、何かそのようなことを聞かれることがありますか。

下浦　理学部は特に受講者の数がもともと少ない科目ばかりでしたから、先生方から、数が多くて大変だということは聞きます。大変でやりがいがあるという観点もあれば、成績をつけるのが大変だというようなこともあるかもしれません。

理学部の先生は、学生のフィードバックを受けようという姿勢がわりと多いと思うんです。だから、意外に全カリで教えた学生が研究室に遊びにきたりというようなこともあるみたいですね。

ただ、高校教育までの理系に関するある種のアレルギーが、やはり学生には高いみたいで、式は書かないと言ったけれども、何か一つ数字を書くと、それだけで式だと思われてしまうとか（笑）、そういうことがあるというのは聞いたことがあります。

佐々木　藤原先生のお話とも関係があると思うんですけれども、授業の組み立て、内容、何を狙って学生に話すのが全カリの授業なのかということについての共通理解はないですよね。

ただ、専門の学問の場合には、学問そのものの考え方がはっきりしているからいいですよね。こういう科目を絶対置かなければいけないとか、こういう順番に組まなければいけないというのがあると思うんです。しかし全カリの場合には、そういう体系性、必然性が

学問の内部からきちんと作られてきているわけではありませんので、それこそ学生のニーズとは何か、学生が何を求めているかということもありますし、われわれから見てどういうことが足りないのか、だからどういうところを補ってやらなければいけないかという配慮も（笑）、たぶんニーズのうちに入るのではないかと思うんです。

どういうことを狙った授業をするのか、学生の声をどう拾って、全カリのなかでそれをどう活かしていくかということに関して、組織上の工夫など必要なのではないかと思うんですが、いま総合Ａの検討グループのなかではそういう方法についての検討もされつつあるんでしょうか。

藤原　総合Ａのカリキュラムの検討グループは、まだスタートしたばかりで具体的にこれからどういう議論が進められていくのか、ちょっとまだわからないところがあるんですけれども……。

まず、望ましいバランスとはいったい何なのかということが問われる必要があると思います。たとえば、カテゴリーのコマ数を形式的に全部同じにするというのが望ましいバランスなのか。人文、社会、自然の３分野を同じコマ数にするのが望ましいのか。あるいはわれわれが学生にこういうことを学んでもらいたいと思っている、そうした考えを反映したバランスを考えるのか。

おそらく形式的なバランスではなくて、最後に言ったような形のものをこれから議論していくことになるだろうと思います。

今のところは、総合Ａはどういう位置づけにあってわれわれはどういうことを志向しているのか、それをまずこのメンバーで再確認していこうということで、いまスタートしています。

佐々木　全カリの立ち上げのときには、旧一般教育部のカリキュラムと教育のスタイル、しきたり、そして構成メンバーのあり方、そういうものがかなり前提にされていました。

今までは教員の都合、あるいは法的な規制ということで全カリ系の科目ができていたわけですけれども、これからは本格的にそういう規制を撤廃して、学生の立場に立った科目設定、授業運営の工夫、内容の検討がされるでしょう。

全カリにとっていちばん大事なのは、やはり内実だと思います。学問の体系によって守られている科目でもありませんし、その学科で学習していくためにどうしても必然的にある程度選ばざるを得ないというものではないわけです。その選択の仕方も、自分で専門の学習をしながら、そこでの必要から自分で考えて選ばなければいけないですよね。専門のカリキュラムと違って、選ぶパターンが今は全く提示されていません。

佐々木　一也　氏

ですから、本当に学生の立場に立ってカリキュラムを作らなくてはいけないという方向性は、しっかりと確認していかなければいけないと思います。

下浦　一つ思うのは、学生のニーズというときに、マス、全体の学生の平均的なニーズと、もう少し違う個々の学生のニーズと、両方あると思うんです。

立教大学の学生だったら、全体として専門学部以外にこれぐらいのことはというような観点が一つ。もう一つは、確かに専門学部に入ったんだけれども、せっかく大学に入ったんだからもうちょっと違うことも勉強してみたいという学生が意外にいると思うんです。そういう学生のニーズにどう対応していくかというのも、ある意味では全カリかなという気がします。

情報のことでいえば、単に使えればいいんだよというレベルの学生がやはり大半なわけです。それからもうちょっと勉強したいという学生がいて、そして、うんと勉強してやりたいという学生もいる。専門学部があればうんと勉強したいとか、もう少しやりたいという学生はその専門学部で受けられるわけですが、立教の場合今はないわけだから、それはどこかで受けないといけない。そこは立教らしく、せっかく学生が散らばっているんだから、教える側も散らばっているところから結集するような形の全カリができるとすごくおもしろい。情報に関していうと、特にそう思いますね。

佐々木　そうですね。全学に既成の学問の都合でばらばらにいるけれども、違う切り口をしたらまとまる先生方というのはいらっしゃいますね。情報はもちろんその典型なんですが、そういう先生方を結集して、総合大学としての力を今までの個別の学部の活動以外の場でも作り上げていく。そういうチャンスを生むのも全カリですよね。

藤原　その一つのやり方が総合Ｂで、これまでいろいろなところで仕事をしていらっしゃった先生を集めて、一つの切り口でテーマを設定して複数の教員で授業を行う。これは学生にもかなり評判がいいんですがやっ

ていらっしゃる先生にも実は評判がわりにいい。

非常に大変だけれども、やってみるとおもしろい。普段なかなか他の先生の講義を見る、人の講義を見る機会がない（笑）。人がどういう話をしているのかを見て勉強になる。あるいは、自分がほかの教員に見られているという意識で授業をするというのが、一つ勉強になる（笑）。それから、別の教員の話を聴くと、非常に複眼的に見られる。そのような声をよく聞きます。それが学生にまたフィードバックされていくわけですから、そういう意味では、総合Ｂは学生と教員、両方にとってわりにいいシステムだと思うんです。

ただ、これは非常にリソースを食いますから、どこまで増やしていくのが適正なのか。全学的な限られたリソースをどううまく使ってやっていくかということを、やはり同時に考えていく必要があると思います。

佐々木　そうですね。いろいろ理想的にやりたいことはあるけれども、できるキャパシティがありますからね。そのなかで最も効果的な配分をして、全体として各学部の学生を最もいい形で育てていくシステムができればいいなと思います。

藤原　先ほど下浦先生がおっしゃった、副専攻に近いようなものについても同じことが言えるのではないでしょうか。情報についてはまさに下浦先生が言われたとおりです。ただし、全学的なリソースということを考えていくと、全部を全カリでまかなうのはおそらくできない。たとえば専門学部同士の他学部聴講をどう活用していくかなどリソースをどのように有効に生かしていくかということが必要だと思います。

学部の違いをこえて、立教大学の学生あるいは卒業生として何を学んでもらいたいかということを考えていかなければならない。

たとえば立教の建学の精神を体現したような科目。キリスト教の精神がわれわれの生活や学問にどういう意味を持っているのか。それをどう総括していくのかというような科目展開が、おそらく必要だろう。

それから、大学を卒業した人間として最低限備えておくべき教養というものですね。たとえば実際に自分の仕事や日々の生活に役に立たなくても、常識的な社会人として持っているべき教養ということがあるだろうと思うんです。

イギリスの専門書などを読んでいると、全く何の註釈もなしにシェイクスピアの一節が出てきて、それで読んでいる人はわかる。そのような最低限知っているべき教養は、たとえば経済学部の学生でも、理学部の学生でも必要だと思います。

藤原　新　氏

もう一つは、現代的な要請というものがあるだろうと思います。社会が変わっても変わらずに必要な素養とは別に、状況が変わっていくことによってそれに対応した科目展開もまた必要だろう。

そしてもうひとつ、各分野の先生がみんなで全カリを支えるということ自体に一つ意味がある。専門が違うと、ものの考え方が学問特有の考え方にかなり規定されてくるという側面があるだろうと思うんです。経済学部の教員は、おそらく経済学的な考え方を自分の生き方の背景に持っている方が多いだろうし、法学部の先生は法学の考え方を自分の生き方、行動の基礎に持っていらっしゃる。

専門教育を受ける学生も、そういう考え方を大学で学んでいくわけですが、別の考え方を持った先生もいるということを、別の学部の先生の講義を受けることで知るということは、大いにあると思うんです。そのように別の学部の先生のお話を聴く機会というのが、もう一つ大事なのではないか。

佐々木　それはおもしろいと思いますね。これは夢物語ですけれども（笑）、各学部が自分のところの教員としてはこんな科目をほかの学部の学生に訴えたいそういうものが全カリの科目で、自分のところの学生が取ったときには、専門科目の基礎科目か、あるいは関連科目かみたいなところに位置づける。ほかの学部の学生が取ったときは全カリだみたいな、そういう科目の展開をやっていいのではないか。

他学部へ行って聴くんだということを少し強調したようなシステムにすると、学生も受けるときの姿勢が少し変わるのではないか。真剣さが。他流試合に行くような感じになりますからね。

下浦　せっかく全カリで情報をやるんだから、理学部の学生のための経済情報処理とか、そういうのはできないかねという議論をしたことがあります。

佐々木　お互いに、自分の学部の学生のためにこういうものをやっていただけたらいいなという希望が出せたらいいですね。そのためには、全カリ固有で開講するためのコマを多少学部に移管して、学部の責任で少し扱えるみたいなものも必要になるかもしれません。

それは今後の課題なんですけれども、とにかく教員も体は一つですから（笑）、そんなにたくさんの科目

はできないので、半ば専門科目の周辺的な科目にもなるし、全カリとしての科目にもしていただけるというものにすると、少しコマも整理できて、教員の負担も軽減できるかなという気もします。

そういうかなり抜本的なコンセプトの転換みたいなものが、いま求められているのではないかという気が私は個人的にはしているんですけれども。

藤原　全カリがスタートするときに言語関係の科目ほど抜本的改革ができなかったという点で、いま、なるべく早い時期に考え直していかなければ、ということで改革が急がれているんだと思うんです。しかしそれでは3年前の改革は全然意味がなかったのかどうか、こういう点では非常によかったけれども、まだこういう点が不十分だという現時点での総括をやはりきちんとしなければいけないと思います。

いま2年経過して、データもだんだんそろってきているところで、そのような総括ができる条件が整ってきた。

佐々木　全くそのとおりだと思いますね。

藤原　その総括を改革につなげていくという点では今のところは、カリキュラムをどう見直していきましょうかという具体的なシステムがまだ充分機能しているとはいいがたい。学生のニーズを吸い上げた、あるいは担当者がどう考えているかという点も吸い上げた。さて、そうしたデータを使ってカリキュラムを具体的にどう変えていくのかという体制の整備が必要なんです。

それはいま、内容の改革ということで個々の教員に任されていたり、全体的なところは運営委員会や構想小委員会で議論しましょうということなんですけれども、カリキュラムを恒常的に見直していくためのシステムをどう作っていくか。これがもう一つ非常に重要な点です。

佐々木　そうですね。そういう常時変えていくためのシステムを作ろうという発想が公に表明されて、みんなが賛同できるというのは、全カリになった最大の成果の一つだと私は思うんです。その意味で、今回、抜本的に変えなければいけないということで案が出てきて、そのようになっていくと思うんですけれども、大いに期待したいと思います。まだまだ話は尽きませんが、今日のところはこの位にしようと思います。両先生にはどうもありがとうございました。

新総合教育科目担当部会長挨拶

斎藤　宏

発足して3年目を迎えた全学共通カリキュラムは、改革による痛みを受けながらも教職員の絶大なエネルギーをそそぎ込んで、立教大学が誇れる教育改革となりつつあります、この大切な時期に総合教育科目担当部会長をお引き受けして、はや3カ月になりました。

全カリ総合部会は、発足時に積み残した諸問題を全カリの理念に沿って解決するために、昨年度より2000年度カリキュラム改革を目指しておりました。しかし、膨大で多様な科目を抱え、また全学部の意向を集約するため、改革を1年間遅らさざるを得ませんでした。現在2000年度カリキュラムの確定と新たに2001年度改革に向けて、次の目標のもとで検討を行なっております。(1)総合A群は今回の改革の中心としたい。そのため検討グループならびに研究室での検討を行なっている。(2)情報教育科目は2000年度に武蔵野新座1日利用の廃止、池袋で実施のための改革を進めている。2001年度改革では、全カリ情報教育のあり方を考えて行きたい。(3)スポーツ実習も同様に池袋5学部向けの科目は池袋校地を中心として2000年度から行われる。このためのカリキュラム改革を目指している。(4)総合B群は総合科目の中心として、一層の充実を図るため検討グループを発足させている。2000年度にも4コマの増設が行われる予定である。以上に加えて、学生の要望、担当教員の声そして学部の意向などを取り入れたカリキュラム見直しシステムも視野に入れている。

武蔵野新座校地の新学部の全カリ総合科目は、2002年度の新学部完成年度を待たずに充実させることを新座2学部と共に検討したい。

一年の任期の中でやらなければならないことが山積しており、就任3カ月ですでに途方に暮れることしばしばです。そんなときみなさんの熱心な討議や情熱を持って取り組んでくださる職員の姿を見て勇気づけられています。

全学共通カリキュラムが多くの学生の支持を得て立教大学に定着するためにいま一番必要なものは、すべての教員一人ひとりが全カリに対して学部教育と同様に責任を持って参加され、いままで以上の情熱をそそぎ続けてくださることではないかと感じています。

総合教育科目の履修動向

総合教育科目担当部会

今年度（1999年度）は全学共通カリキュラム総合教育科目がスタートして3年目にあたる。総合教育科目は1年次から4年次にかけて履修することになっており、その意味では全カリはまだその創成期の前半を終えたにすぎない。しかし、4年間の大学生活のうち、前半2年間で教養科目を学び、後半2年間で専門科目を学ぶという伝統的な考え方は、いい悪いは別にして、学生にも教職員にも根強く残っているように思われる。実際、専門学部の科目には下級年次では履修できないとされている科目が少なくないこともあって、相当数の学生が全カリの総合教育科目については1、2年次のうちに卒業に必要な単位の大半を修得してしまおうとしているようである。とすれば、最初の2年間を終え、3年生の前期の履修登録が済んだ現時点で、誕生以来の全カリ総合教育科目の履修について概括的に振り返ってみることにも一定程度の意味があるであろう。

まず、表1「総合教育科目(旧3分野)履修・単位修得状況」を御覧いただきたい。ここでは、1996〜99年度の総合教育科目について、学生が履修登録をした科目数とその単位数、および単位が修得できた科目数とその単位数とが、学年別の平均の形で表示されている。ただし、全カリ実施以前の96年度については、旧一般教育科目の3分野が対象とされ、また、99年度はまだ前期履修登録の科目数と単位数の情報しかない。

全カリの第一世代にあたる1997年度入学者（表1では太線で囲んである）は、1年次(97年度)には、9.5科目＝18.3単位分の科目の履修登録を行ない、14.4単位を修得した。この学年の学生は翌98年度には2年次に進み、表を右下にたどっていくと、5.7科目11.4単位を登録し、7.7単位を修得した。その結果、今年度(99年度)の履修登録を前に、3年生は平均22.1単位を修得済みであるということになる。97年度入学者から、この科目群で修得すべき単位は24単位（法学部では20単位）となっているため、取り残した単位はそれほど多くないはずであるが、99年度前期に彼らは平均5.5単位分の科目を登録している。秋には別に後期科目の登録が行なわれることを考慮すれば、これは予想を上回る数字であり、卒業要件単位が36であった96年度入学者（97年度入学者のすぐ上のブロック）よりも相対的に多くなっている。この点の分析が今後の全カリ総合教育科目の履修者数の予測の上で重要となってくる。

この原因としては、①学生が卒業要件単位を早く確保しようと前期に殺到した（後期は激減するだろう）、②全カリの超過履修単位が専門学部で卒業に必要な単位として認められることを意識して全カリ科目を余分に履修した、③全カリの科目内容に惹かれて多くの科目をとった等、様々なことが考えられるが、結論を得るには、少なくとも今年度の後期履修登録の結果と前後期の単位修得状況を見る必要がある。

表1　総合教育科目(旧3分野)履修・単位修得状況

1999. 5. 13

	1年				2年				3年				4年				平均			
	履修		修得		履修		修得		履修		修得		履修		修得		履修		修得	
	科目数	単位数	科目数	単位数	科目数	単位数	科目数	単位数	科目数	単位数	科目数	単位数	科目数	単位数	科目数	単位数	科目数	単位数	科目数	単位数
1996年度	6.8	27.0	5.2	20.6	3.9	15.4	2.6	10.2	1.5	6.0	0.7	2.8	1.3	5.2	0.4	1.7	3.3	13.2	2.2	8.6
1997年度	9.5	18.3	7.5	14.4	9.9	19.1	6.5	12.1	3.4	6.7	1.5	3.0	2.7	5.4	0.7	1.6	6.3	12.2	4.0	7.6
1998年度	9.7	18.8	7.8	14.9	5.7	11.4	3.9	7.7	4.0	8.1	1.8	3.5	2.9	5.8	0.8	1.6	5.5	10.9	3.5	6.8
1999年度前期	5.1	10.1			3.2	6.4			2.7	5.5			1.9	3.8			3.3	6.4		

（注）1996年度はすべての学年が一般教育課程適用で卒業要件単位数は36単位
1997年度1年次から全学共通カリキュラム適用で卒業要件単位数は24単位(法のみ20単位)
1998年度から開校した観光学部、コミュニティ福祉学部は除いてある。

所定の紙数はほぼつきたが、表2「総合Aカテゴリー別1コマ平均履修者数」についても一言触れたい。

この表を見ると、カテゴリーごとに1コマ平均の履修者数にかなりのばらつきがあり、カテゴリーの2、4、5が相対的に多人数であるということは間違いがない。ただ、それぞれのカテゴリーの年度・学期ごとの平均履修者数は相当大きく変動しており、その理由のひとつとして、ここで紹介する余裕はないが、履修者の集中するごく一部の超人気科目の休開講といった事情があることが別のデータから分かっている。

科目の履修者数は、良質の教育を提供するために考慮すべき重要な要素であり、ここで述べた動向を考慮しつつ、今後の総合教育科目の展開コマ数、そのカテゴリーごとの配分などを慎重に決定していきたい。

表2　総合Aカテゴリー別1コマ平均履修者数

カテゴリー	1997年度					1998年度					1999年度		
	コマ数		1コマ平均			コマ数		1コマ平均			コマ数		1コマ平均
	前期	後期	前期	後期	年間	前期	後期	前期	後期	年間	前期	後期	前期
A−1 思想・文化	33	35	138	132	135	32	31	134	133	134	30	33	138
A−2 歴史・社会	32	34	255	179	216	44	44	183	184	184	42	43	245
A−3 芸術・文学	34	32	140	131	136	29	26	124	110	117	28	27	120
A−4 環境・人間	27	29	264	293	279	29	23	249	242	246	26	25	310
A−5 生命・物質・宇宙	16	14	240	214	228	12	12	226	191	208	12	12	204
A−6 数理	7	5	39	58	47	8	4	57	59	58	6	4	95
総合A 合計	149	149	193	179	186	154	140	171	166	168	144	144	200

（注）1998年度から開校した観光学部・コミュニティ福祉学部は除いてある。
演習科目は除いてある。

ドイツ語入門統一教科書『立教生のドイツ語』ができるまで

ドイツ語教育研究室主任　小松　英樹

全カリ運営センター準備委員会が出した答申（1994年10月31日）は現在の全カリ体制を築くための、文字通りの基礎になった文書だが、その分厚い答申の中には「新ドイツ語カリキュラム案」や95年実施予定の「第一次実施案（パイロットプログラム）」も載っている。そこには1年次のテキストについては「共通基準の内容にかなった市販のまたは独自に開発された教材を使用する」と記されている。これは時間がないので先ずは市販の教科書を使うが、将来は自前の教科書を開発する、という意味であった。自前の教科書、それも斬新でセンスが良く、使っていけば自然に力がつく、究極の語学テキスト（への端緒）、それが私たちの夢みた教科書だった。それからは時間との闘いだった。忙しく日を送る室員たちである。一同に会するための日程調整がそもそも大変である。そんな中作業は96年から始まった。まず教科書の目標とするところ、基本コンセプトをどうするかについて話し合い、教科書のためのドイツ語でなく、不自然でない生きたドイツ語を使うこと、文法は網羅的にせず重要度に応じてめりはりを効かせて扱う、また章ごとの構成に変化をつける、そして基本単語集を別途に作る等のことが決まった。こうして共同の作業は基本単語と基本表現の選別から始まったが、しかし始めてみるとこの大きな仕事を専任の教員だけで完遂するのはとても無理なことがわかってきた。そこには内部事情的な複雑な要素もからんでいるのだが、それはともかくとして、自前の教科書の完成はドイツ語教育にかかわる私たち全員の悲願であったことは間違いなく、この共通の思いに後押しされるようにしていて、その完成もまたあったことはまぎれもない事実である。

そうした基礎的なコンセプト、基本語彙集が確定したのを受けて、また97年度に市販の教科書を統一教科書として使った経験を生かしつつ、実際に最初のテキスト（98年度用）を執筆する仕事を請け負ってくれたのは、やはり97年度からドイツ語教育、教授法のエキスパートとして私たちの同僚となってくれた嘱託講師の4人の人たちであった。私自身はこの年休暇を頂けて大学には来なかったから、4人の執筆者がどんなに苦労して、時間に追われてその仕事をしたかについては、直接には見聞していない。しかしながら98年から復帰して、改訂版の作成に協力した者として、その作業がどんなにハードであったかは、身に沁みてわかる。ドイツ人の執筆者は都合で交代し、また一人は所属を他大学に移したが、今度は非常勤講師となって残ってくれて改訂版の執筆に心血を注いでくれた。改訂版作成の作業は98年6月から開始された。98年度用に作られた統一教科書は時間の制約の中、押し寄せる平常の仕事の合間を縫って作られたため、前期と後期の分冊になっていた。それを一冊に統合することにした。そしてテキスト部分が少なすぎるという批判を入れて、とくに前期分は全面的に新しく書き下ろすことにした。コラム欄はドイツ人に書いてもらい、テキスト部分は日本人が原文を書き、それらを持ち寄って全員で検討して仕上げていった。スタッフはほぼ毎週集まってああでもない、こうでもないと推敲に推敲を重ねた。そういう時細心で慎重なある執筆者の存在は貴重であった。ファックスでのやりとりも頻繁に行なわれた。そして今回は大手の教科書専門会社に出版を頼むことにしていたから、タイムリミットがあり、出版を授業の始まる直前までぎりぎり伸ばすとしてもそこから逆算して、3月初めまでには決定稿ができていなければならなかった。そういうわけでそもそもが時間との競争の作業が超の字のつく急ぎの仕事となった。私を除けば、全員が押せばそのままぱったり倒れてしまうのではないかと思われるほどに懸命に働いてくれた。当然ながら締切を限界を越えるくらい延ばして、無理を聞いてくれた出版社には感謝の言葉以外にないが、それにもまして4人の執筆者の努力にはひたすら頭を下げるばかりである。「ほら、これが私たちの作った統一教科書です」と誇らしく人にお見せできる喜びを味わえるのも彼らのお陰だからである。

そして今はまたさらなる改訂版に向けての仕事が始まっている。

1999年度 全学共通カリキュラム運営センターメンバー一覧

【運営委員会】

	氏　　名	所属	小委
部　長	所　一彦（トコロ　カズヒコ）	法法	
部会長	斎藤　宏（サイトウ　ヒロシ）	理化	総合
	白石　典義（シライシ　ノリヨシ）	社産	言語
学部選出☆	原　好男（ハラ　ヨシオ）	文フ	言語
	石﨑　等（イシザキ　ヒトシ）	文日	総合
	☆ 名和　隆央（ナワ　タカオ）	経経	総合
	☆ 小林　純（コバヤシ　ジュン）	経経	言語
	須原　準平（スハラ　ジュンペイ）	理化	言語
	☆ 小泉　哲夫（コイズミ　テツオ）	理物	総合
	庄司　洋子（ショウジ　ヨウコ）	社社	総合
	☆ 都築　誉史（ツヅキ　タカシ）	社産	言語
	☆ 舟田　正之（フナダ　マサユキ）	法法	総合
	☆ 佐藤　彰一（サトウ　ショウイチ）	法法	言語
	白坂　蕃（シラサカ　シゲル）	観観	総合
	☆ 図師　雅脩（ズシ　マサハル）	観観	言語
	☆ 佐藤　研（サトウ　ミガク）	コミ福	総合
	岡田　徹（オカダ　トオル）	コミ福	言語
特別教務	小西　一雄（コニシ　カズオ）	経営	
専門委員	青木　康（アオキ　ヤスシ）	文史	総合
	藤原　新（フジワラ　アラタ）	経経	総合
	前田　良三（マエダ　リョウゾウ）	文ド	言語
	野田　研一（ノダ　ケンイチ）	観観	言語

【総合構想小委員会】

斎藤　宏、石﨑　等、名和隆央、小泉哲夫、庄司洋子、舟田正之、白坂　蕃、佐藤　研、青木　康、藤原　新、山田久美子、鈴木秀一、上田恵介、下浦　享、荒木　汐

【言語構想小委員会】

白石典義、原　好男、小林　純、須原準平、都築誉史、佐藤彰一、図師雅脩、岡田　徹、前田良三、野田研一、鳥飼玖美子、小松英樹、山本顕一、飯島みどり、谷野典之、田中　望

【総合教育科目担当部会】

部会長：斎藤　宏

研究室名		氏　名	所属
人文科学	主任	山田久美子	法
		西原　廉太	文キ
	☆	木寺　廉太	文キ
	☆	小山　真紀	文教
		上田　信	文史
		佐々木一也	文教
		下地　秀樹	講教
		横山　紘一	文日
社会科学	主任	鈴木　秀一	経営
	☆	豊田由貴夫	文史
	☆	山田真茂留	社社
	☆	橋本　博之	法法
自然科学	主任	上田　恵介	理化
	☆	塚本　伸一	文心
	☆	比嘉　達夫	理数
	☆	柳町　朋樹	理物
		栗原　謙二	理化
		佐々木研一	理化
情報科学	主任	下浦　享	理物
		石井　巌	文心
	☆	郭　洋春	経経
		長島　忍	経経
		山口　和範	社産
		東條　吉純	法国
		泉本　利章	観観
		西田　修	観観
		小林　悦雄	コミ福
スポーツ健康科学	主任	荒木　汐	コミ福
		藤井　陽江	コミ福
	☆	松尾　哲矢	コミ福
		濁川　孝志	コミ福
		沼澤　秀雄	コミ福
		関口　良輔	コミ福
		田中　幸吉	コミ福

☆印は1999年度新任

【言語教育科目担当部会】

部会長：白石　典義

研究室名		氏　名	所属
英　語	主任	鳥飼玖美子	観観
		三浦　雅弘	文英
		渡辺　信二	文英
		P.H.アラム	経経
		高山　一郎	経経
		山本　博聖	理物
		実松　克義	社産
		阿部　珠理	社社
		J.ショールズ	社産
		白石　典義	社産
		鳥飼慎一郎	法
		M.カプリオ	法
		P.カニングハム	観観
		野田　研一	観観
ドイツ語	主任	小松　英樹	社社
		原　克	文独
		高橋　輝暁	文独
		小島　康男	文独
		前田　良三	文独
		斎藤松三郎	観観
		宮内敬太郎	コミ福
フランス語	主任	山本　顕一	社産
		原　好男	文仏
		前田　英樹	文仏
		細川　哲士	文仏
		宇野　邦一	法
		小倉　和子	観観
		中島　弘二	コミ福
スペイン語	主任	飯島みどり	法
		佐藤　邦彦	社産
		野谷　文昭	法
中国語	主任	谷野　典之	経営
		呉　悦	経営
	☆	舛谷　鋭	社産
諸言語	主任	（白石典義）	社産 ※
日本語	主任	田中　望	観観
		沖森　卓也	文日

※言語部会長の兼任

第7回　立教大学英語教育セミナー

主　催　　立教大学全学共通カリキュラム運営センター 英語教育研究室
日　時　　1999年9月17日（金）　13：00～
場　所　　立教大学　太刀川記念館（池袋キャンパス）
基調講演　　J. D. Brown 氏　（ハワイ大学教授）